

立ち読み版

「おくびょうな蟲使いにくちづけを」

高石
ふう

■ 目次 2

1	美歩とアウラ	4
2	もうひとつの悩み	7
3	蟲	10
4	増えた?	14
5	膨らむ胸	16
6	弱すぎる抵抗	18
7	ガラス越しの夜	21
8	暗闇の罌	25
9	蟲使い	29
10	緑色の宝珠	40
11	蟲の案内	48
12	ブラッドワームの襲撃	52
13	蟲たちの美歩	59
14	おくびょうな蟲使い	63
15	二人の夜	68
16	季節の中で	78

□	あとがき	80
---	------	----

ご注意

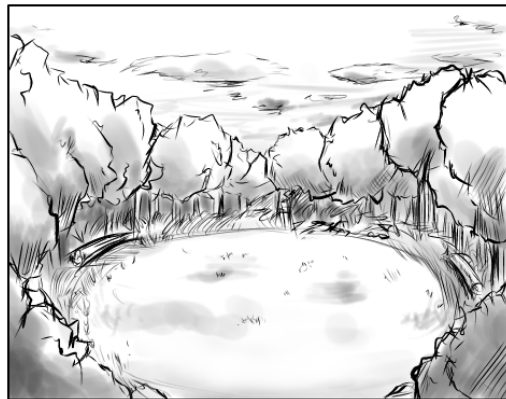
本作品は、モニタで活字を読むということを前提に作られており、改行後に字下げ、一行間のスペースが取られています。これは、隙間のない文章がモニタびっしりならぶと、読みにくいかなと思ひまして、そうしております。従来の文章ルールですと、改行、一行あけは、お話の内容が変わるような扱いになります。但し、本文ではあくまでもモニタでの読みやすさを配慮したカタチであることを、ご了承ください。(なので、従来の大段落は、二行あけや、もしくは◆記号を用いて表記しています。)

立ち読み版では、「2」の「もうひとつの悩み」を収録いたしました。

*目次のページ数は、本編のものです。

（目次のページは画像を使っています）

2 もうひとつの悩み



美歩は日中、森の中の〈タータ〉にいました。〈タータ〉とは、直径五十メートル程の円形の広場のことで、魔法の練習を行う場所のことです。ここは、静かで精神の集中もしやすく、魔法の暴発を空に逃がす仕掛けもあるので、魔法の練習をするのにうってつけでした。実際、土の上のあちらこちらに、不自然にもりあがった、独特の「魔法の跡」が残っていました。でもそれらはみな、ちゃんとならされ、もう既に下草が覆おおっています。

美歩はこの場所に来るといつも、大きく息を吸って両手を横に広げ、空に向かわせ、ゆっくり胸の前で重ねるという動作を何度も行います。魔法の教科書にある、「自分と大地を同化させる」を、イメージしようとするのです（これは、本当にごく初等の練習で、魔法を使えるようになると、みんなほとんどやらなくなります）。そしてそのあと、首にかけた皮ひもをひっぱって、胸のロケットを取り出し、その先に嵌はめた〈宝珠ほうじゆ〉を「発動状態アクティブ」にして、学校で習ったことをもう一度、同じように繰り返してみなのです。

〈宝珠ほうじゆ〉とは、すこし大きめの、美歩が居た世界の言葉でいう「宝石」のことで、多くの人は簡単に「石」と呼んでいます。とにかくこの世界には、この「石」がたくさんあり、魔法の力と密接に関係しています。ほとんどの場合、魔法使いはこの「石」を媒体に魔法を使いますが、美歩にとつての「石」は、前に住んでいた世界と同じで、言葉どおり「飾り物」にしかありませんでした。

一日中美歩はこうして、森の中で魔法の練習をして過ごしました。じつはこのように安全が図られていて、しかも「誰も見られない」ところでじつくりと練習ができる場所と言うのは、それほど多くはないのです。それに今、この施設周辺には、美歩とアウラ以外の誰もいません。ですから、ここでこれだけ失敗しても誰にも見られませんし、誰にもバカにされません。

この王国所有の施設は、精霊魔法の中でも特に〈グラント〉と呼ばれる、上位の土属性魔法使いの為に開かれたものでした。美歩の練習する「土属性」の魔法は、森と、とても相性が良いのです。そのせいか、なんとなく美歩にとっても、他の場所で練習するのよりも手ごたえを感じるような気がしました。そうそう、アウラも土属性、〈グラント〉クラスの魔法使いです。

そんな場所を与えてもらったので、美歩は毎日、本当に一生懸命頑張りました。しかし、やはりなかなか上手く行きません。暗くなるまで頑張つて、結局いつものようにとぼとぼと館に帰り、アウラに励まされるという毎日の繰り返しでした。アウラとの会話は、とても楽しいひと時ではあったのですが、やはり、魔法が使えないという焦りや悩みを、心のそこから解きほぐすことはできませんでした。

そして、そんな美歩は最近、もうひとつの悩みを抱えてしまいました。それは、夜、一人になって、ベッドに入ったことです。美歩にとつて、あまりにも大きすぎるブレッシャーがかかっているからでしょうか。いつも美歩は、一人になってベッドに入ると、自分で自分の体を慰めるようになってしまったのです。こっそりとシーツの中で、自分の乳首を強くいじめ、つまみ、一人で喘ぎ声をあげていました。快楽に逃げ込んでいる時は、他の事を何も考えなくてすみます……。

現実から逃げる為に繰り返してしまうオナニー……。美歩は、これはよくないことだと思っていました。でも気がついたら、もう、手が勝手に動いてしまうのです。自分で乳首をいじっているうちに、今度は下半身がうずいてきて、右手と左手を駆使して、快楽をむさぼります。そして、絶頂の波がおしよせたあと、ようやくゆっくりと、眠りにおちていくことができます。



以上で立ち読み版はおしまいです。

「蟲」とかのシーンが無いじゃないか！って……すみません、
ちようどキリがイイところがココしなくて……。

全編を通じて、翻訳された外国古典ファンタジーみたいな感じが出せれば
なと思って製作しました。

こんなエロチックファンタジーを、どうぞお楽しみください。